

が主体となるが、栽培面積に制約があるから極力反当収量特に反当栄養収量の確保に着目しなければならぬ。これ等の作物の栄養収量は地力、生育日数、収穫時期によつて異なるほかに、作物の種類によっても著しい差があるから選択にあたつては十分注意しなければならぬ。例えば乾牧草もあるべく豆科牧草特に赤クロベー、ルーサンの如き、いわね科であればブローモグラスの如き蛋白質含量の高いものを選び、エンシレージの場合もデントコーンは黄熟期(デントコーン)の栄養成分の含量が最高のとき)に切込める様な条件を以て、更に蛋白質の含量を高めなければならない。根菜類としては家畜ビートの栽培が理想的であるが、矢張り乾物量の多いハーフシューガードを大いに利用すべきである。又かぶは生育日数あたりの栄養生産性の高い根菜であり、これら等の地帶で二毛作の出来る唯一のものであり大いに活用したい。

以上は主として冬のための準備であり、出来るだけ豊富に用意したいが、他の間の青刈利用の期間も出来るだけ延長して冬の期間を短くする工夫も必要である。綠飼の連続給与の目的はそのための工夫といつても差支えない。これも無計画では実行不可能であり、前年の秋から計画を立て、従つて面積から、長い期間、而も常に栄養価の最高値の時期に青刈を行うことが出来る様な工夫である。

が必要である。そのためには前述のラノノクロペーの放牧地や永年採草地なども当然計画の中に織込み、適切な飼料作物を数多く選び販売作物と同様な肥培管理を行つて多収穫を期さなければならぬ。第一図はこの地帯で利用することの出来る青刈飼料作物、牧草、根菜類の生育期間を図示したものである。図を見れば開拓する様に数種の作物を組合せることによつて年間連続して青刈収穫が可能であり、同時に併行して冬季貯蔵飼料の生産も行われる。この中で特に推奨したいのは、早春の青刈飼料としては秋蒔の青刈ライムギ、春蒔の青刈燕麦が広く利用され始めているが、更に秋蒔を考慮して、青刈ライムギにはヘアリーベッチ、青刈エンドウ、青刈燕麦にはコモンベッチの混播をすめたい。又青刈デントコーン、スイダングラス、ソルゴー等には、同じく蛋白率のための混作がのぞましい。

第1表 大葉つるまめ、デントコーンの反当収量

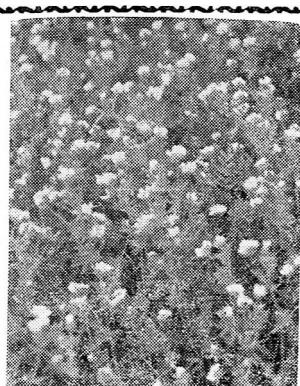
区分	草丈 (糧)	反当生草 収量(穀)	熟度	摘要	要
大葉つるまめ	170	635	開花終	1 播種量反当つるまめ3合、デントコーン4升	
大葉つるまめ混播の デントコーン	270	2,818	糊～完	2 眠幅、株間デントコーン2.5×2.0尺、つるまめ5寸おき点播	
単播のデントコーン	270	2,560	同		

第2表 大葉つるまめ、デントコーン混播の養分収量

区分		粗蛋白	粗脂肪	可溶無 氮素物	摘要	要 求
单播区	デントコーン成分(%)	1.4	0.4	8.9	生草収量 2,560匁	
	反収(匁)	35.8	10.2	227.8		
混播区	デントコーン成分(%)	1.4	0.4	8.9	同 2,818匁	
	反収(匁)	39.5	11.3	250.8		
区	大葉つるまめ成分(%)	23.5	5.8	34.8	乾草(葉、柄共) 乾草換算収量 159匁	
	反収(匁)	37.4	9.2	553.3		
計 反収(匁)		76.9	20.5	804.1		
反当栄養収量比		2.1	2.0	3.5	デントコーン単播区の反当栄養収量を1として	

夏の乳価高の時期に一滴でも多くの牛乳を搾ろうとするのは一般的の要求であるが、暑熱で乳牛の弱る時期であるから、夏の飼料を多給して乳の生産を図ることは無理であつて高蛋白な良質青刈飼料を給与することが必要です。青刈大豆は六〇日から九〇日で盛夏の頃反収七〇〇貫位の青草が得られ、この蛋白量は米糠一五〇貫にも相当するもので、家畜の健康と生産のため極めて有用なものである。

青刈大豆



セラダラ（つのうまごやし）
ルーピンと同様に酸性土壤に強く、砂質土、泥炭地等の不良土壤にもよく耐えて生育するので開墾地特に火山灰質の高原等に適します。
① 水田裏作として稻刈取後畦立播種（十一月に入る前迄に）
② 烟作、果樹園、桑園にもよい。
③ 寒冷地では春播きとし、特にルーピンとの混播は根瘤菌も同じで立性、匍匐性の組合せから良好で混播は单播の四割以上の增收となります。
最近は北海道に於ても泥炭地の飼料綠肥作物として優秀性が認められ奨励作物となつて居ります。

ヤリトモリのいきもの